

においてNK活性が低下している傾向が示唆された。

次に担癌生体でのNK活性低下の機序を検討し、ヒト大腸癌株、胃癌株の培養上清中で健康人末梢血単核細胞を培養、NK活性を測定した。両腫瘍培養上清ともNK活性を抑制し、腫瘍細胞がNK活性を抑制する何等かの物質を分泌していることが示唆された。

39. 術中エネルギー消費量の測定—間接熱量計の応用—

山道 博

術中のエネルギー消費量を測定することにより個体に及ぼす手術侵襲というものを数値で捕えることが可能であるばかりでなく、多くのパラメーターとの相関についても知ることを今回の目的とした。

間接熱量計を単純に半閉鎖式麻酔回路の呼気用の管を接続することは不可能であり、麻酔中の呼気を全量間接熱量計に取り込むためには非再呼吸式麻酔を行なう必要がある。そのために麻酔回路の一部改造が必要であり、呼気弁の直前に半閉鎖・非再呼吸切替弁を製作し設置した。この改造麻酔器製作により術中の間接熱量計使用が可能となった。現在胆石症手術例を中心に測定開始しているが、今後胃癌、大腸癌手術を例数を増して術中の侵襲に関して様々な方向から検討を加えて行きたいと考えている。

40. 血管外肺内水分量の測定

横山 利光

目的：肺水腫の診断、定量のために血管外肺内水分量を測定した。

対象：平成元年4月1日より平成3年1月31日まで救命救急センターICUに入室した90症例。

方法：90症例に、スワンガンツカテーテル、インピーダンスカテーテルをそれぞれ内頸静脈、大腿静脈より刺入し、熱一ナトリウム二重希釈法により血管外肺内水分量を測定し、心拍出量、動脈血ガス分析、血漿膠質浸透圧を測定した。

結果：28症例を肺水腫と診断したが、肺水腫症例では血管外肺内水分量は高値を示し、診断能において優れており、肺水腫症例の経過とも一致していた。CAVH(血液浄化法)の有効例もその経過を反映していた。

考察：血管外肺内水分量の測定は、肺水腫の診断、治療経過を追う上で有効な指標の一つになりうると考えられた。

41. MRIによる直腸癌壁深達度およびリンパ節転移診断

板橋 道朗

目的：直腸癌の術前診断におけるMRIの壁深達度診断能、およびリンパ節転移診断能についてretrospectiveに検討した。

対象：1988年1月以降に手術された直腸癌のうち術前にMRIを施行した64例を対象とした。

方法：(1)壁深達度診断；腫瘍の占居部位別、壁の局在別に壁深達度を検討した。(2)リンパ節転移診断；傍直腸リンパ節転移診断は横断像を用いて、側方リンパ節転移診断は骨盤側壁の矢状断像を用いて検討し、いずれもリンパ節が描出されたものを転移陽性とした。

結果：(1)壁深達度診断；64例中53例に正診(正診率82.8%)、(2)リンパ節転移診断；傍直腸リンパ節転移診断では64例中52例に正診し、側方リンパ節転移診断では15例中13例に正診、偽陰性例は認められなかった。

結語：MRIを用いることにより、より詳細で正確な直腸癌の術前進行度診断が可能であると思われた。

42. 大腸癌症例における血清ラミネン値の検討

泉 公成

対象および方法：対象は大腸癌末梢血150例、還流静脈血49例。ヘキスト社のラミネンP1キットを用いてRIA法にて測定した。

結果：(1)血清ラミネン値(以下：LN)は、肝転移症例、壁深達度ss以上、脈管像襲症例で、有意に高値を示した。(2)静脈侵襲侵襲度に相関して有意に高値を示した。(3)肝転移率は、静脈侵襲程度に相関し、深達度ss以上で有意に高く、LNと同様の傾向を示した。(4)肝転移症例、v2v3症例では、還流血中LNが末梢血よりも高い傾向が見られ、原発巣から流出したLNが肺転移に重要な意味を持つと思われた。以上より、LNは大腸癌肝転移マーカーとして今後期待できると思われた。(5)cut off値は、重要な予後因子である静脈侵襲との関係から、V0群とV1~3群の判別区分点1.44(判別の中率：75.0%)が適当であると思われた。

43. 乳癌予後因子の検討(過去10年間の教室例より)

村木 博

1979年より1988年までの10年間に当科で手術を行った乳癌患者のうち415例を対象として統計的まとめと予後因子の検索を行なった。

カプラン・マイヤー法による10年生存率はstage分類ではstage Iでは93.7%、IIでは79.2%、IIIでは